



Title	タイにおける日本文学
Author(s)	アッタヤ, チョーティカプラカーイ
Citation	詞林. 2000, 28, p. 49-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67459
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

タイにおける日本文学

チヨートイカブラカーイ・アツタヤ
チャトウラセンパイロート・マツタナー

先進国である日本がタイをはじめ、アジア諸国の人々にとって、憧れの的であることは言うまでもない。今日まで様々な媒体を通じ、「日本」はタイの人々に大いに親しまれ、影響を与え続けてきた。流行、生活空間、思想など様々なレベルで日本の文化に興味を抱くタイの人々。しかし、雑誌、テレビドラマ、音楽など現代の日本の流行についての情報はたくさん得ている一方、日本文学についての知識はほとんどゼロに近いというのが現状である。日本文学が始めてタイの人々に紹介されたのは、半世紀前のことである。約五十年という期間を経て、「日本文学」はどのように扱われてきたのかふりかえって考える必要がある。

一 タイにおける日本文学教育と研究

タイでは、日本に興味がある人が多く、タイにおける日本についての研究も盛んである。ただし、経済、政治、社会、歴

史についての研究は盛んだが、日本文学についてはあまり盛んではない。また、日本語を勉強するタイ人は少なくはないが、日本文学に興味を持つ人はほとんどいない。

タイにおける日本文学教育の状況について、チュラロンコン大学助教授カンラヤニー・シタスワン氏の論文^[1]を要約すると次のようになる。

大学レベルの日本語講座は一九六五年に初めてタマサート大学で開かれた。一九六六年にチュラロンコン大学でも開かれるようになった。これらは日本の外務省の奇贈講座で選択科目として始めた。一九七四年にチュラロンコン大学で専攻科目に昇格してタイで初めて正規の本格的な日本語専攻コースが誕生した。その後、多くの国立大学でも日本語講座が開設され、日本語は次第にタイの教育機関に普及してきた。一九八八年にはタイにおける日本語教育機関はおよそ二百ほどで、学習者はほぼ四万人近くにも達している。しかし、その教育機関の中で日本語以外、つまり日本文化、日本文学を教えるところは非常に少ない。チュラロンコン大学の日本語講座では、「日本文学史」は必修科目だが、「日本近代文学」は選択科目なので、やはり日本文学に興味を持つ学生しか選択しない。

また、タイにおける日本文学の出版について、先述のクラヤニー論とナイヤナー・チットランサン²⁾の論文を基にしてまとめると次のようになる。

チュラロンコン大学はタイ語訳の日本近代文学短編選の第一集、第五集を出版した。第一集、第三集は日本語講座の学生と先生の協力の結果で、日本語講座の「日本近代文学」の授業で四年生が各自で作品を選んで翻訳したのを教師がまとめたものである。学生は日本語を三年半しか勉強していないうえに、日本文化の背景に対する知識も少なかつたため、担当教師並びに日本人教師の指導と協力を仰ぎながら、代表的な作品をタイ語に訳した。チュラロンコン大学の他に、タマサート大学も日本文学のテキストやタイ語訳の日本文学を出版した。タイの文部省もタイの子供の教育のために日本の昔話をタイ語に多く翻訳させた。例えば、一九八〇年に「日本昔話集」「日本の民話」「日本古典文学全集」の中から面白い昔話を十話選択し、チュラロンコン大学の協力によってタイ語に翻訳した。タイでは、タイ語訳の日本文学を出版しているところが多く、カラット出版社、ヤオワシオン出版社、ドークヤー出版社、ドアンガモン出版社、ピースア出版社などである。また、トヨタ基金も奨学金などの制度を設けて、日本文学の翻訳を奨励している。

タイでは日本文学を研究する人はほとんどいない。日本文学研究者の多くは日本やアメリカなどへ留学している人達である。しかし、その人達は帰国した後、日本文学を研究し続けるより翻訳の仕事に向かつてしまふ。タイでは日本文学を知らない人が非常に少ないため、日本文学を研究して論文を書いても、読んでくれる人がいない。言い換えれば、読める人がいないのである。したがって、読者の範囲を広めるため、翻訳の仕事がより先になすべきことだと考えられているのである。このように、研究することよりも先にタイの人々に日本文学を紹介し、日本文学に触れる機会を増すことは必要なのである。

数少ない日本文学研究の例として、一九九三年のピヤチット・ターデーイン氏の「川端康成論」³⁾、一九九五年のサオワラック・スリヤウオンバイサーン氏の「Intertextuality in the "Yamato monogatari Plays" of the Noh Theatre」⁴⁾、一九九七年のモンター・ピムトーン氏の「芥川龍之介の小説における基本的構造——「蜜柑」と「年末の一日」との比較」⁵⁾などがある。他に、タイ語訳の日本文学の研究もある。例えば、一九九〇年のナイヤナー・チットランサン氏の研究で、一九七七—一九八六年の間にタイ語に訳された日本文学の作品を検討し、当時タイにおける日本文学について調査したものである。ナイヤナー氏によると、タイ語に訳された日本文学作品は、社

会問題、特に「死」を主題にしたものが最も多く、「友情」がその次となる。また、タイにおける日本文学は、ほとんど英語訳からタイ語訳にしたもので、原作とは意味がずれているところが多いと論じられている。

一九九九年にカンラヤニー・シタスワン氏の「タイ語訳の日本文学」がある。これは第二十三回国際日本文学研究集会において発表したものである。カンラヤニー氏はタイ語訳の日本文学を調査し、年表にまとめた。この年表については次の「タイ語訳の日本文学」で述べる。

二 タイ語訳の日本文学

タイ語に翻訳された日本文学はまだ少なく、歴史も浅くて五十年になっていない。タイ語に訳された日本文学の多くは、近代文学と児童文学である。次に、先述のカンラヤニー氏のタイ語訳の日本文学の年表を紹介しておきたい。

タイ語訳の日本文学の年表

- 一九五四年 徳富蘆花「不如帰」
- 一九六六年 芥川龍之介「羅生門」(藪の中)
- 一九六七年 竹山道雄「ビルマの竖琴」
- 一九六九年 川端康成「山の音」

- 一九七一年
- 一九七二年
- 一九七四年
- 一九七七年

- 一九七一年 芥川龍之介「羅生門」と他の短編
- 一九七二年 川端康成「雪国」
- 一九七四年 三島由紀夫「潮騒」
- 一九七七年 三島由紀夫「午後の曳航」
- ★「日本近代文学短編選第一集」(チュラロンコン大学)
 - ・ 国木田独步「春の鳥」
 - ・ 森鷗外「高瀬舟」
 - ・ 志賀直哉「正義派」
 - ・ 同「小僧の神様」
 - ・ 武者小路実篤「だるま」
 - ・ 菊池寛「入れ札」
 - ・ 芥川龍之介「蜜柑」
 - ・ 同「杜子春」
 - ・ 川端康成「伊豆の踊子」
 - ・ 井伏鱒二「山椒魚」
 - ・ 佐多稲子「キャラメル工場から」
 - ・ 太宰治「走れメロス」
 - ・ 小林多喜二「蟹工船」
- ★芥川龍之介「河童」
- ★「日本近代文学短編選第二集」
 - ・ 森鷗外「山椒大夫」
 - ・ 有島武郎「一房の葡萄」
- 一九七八年
- 一九七九年

- ・同「僕の帽子」
 - ・同「火事とボチ」
 - ・芥川龍之介「秋」
 - ・尾崎一雄「華燭の日」
 - ・川端康成「水月」
 - ・横光利一「蠅」
 - ・島木健作「赤蛙」
 - ・葉山嘉樹「淫売婦」
 - ・林美美子「風琴と魚の町」
 - ・堀辰雄「ルベンスの戯画」
- ★「日本近代文学短編選第三集」
- 三島由紀夫の短編集「憂国」
 - ・島崎藤村「のはした」
 - ・佐藤春夫「スペイン犬の家」
 - ・内田百閒「昇天」
 - ・壺井栄「柳の糸」
 - ・井伏鱒二「屋根の上のスワン」
 - ・太宰治「おさん」
 - ・夏目漱石「夢十夜」
 - ・開高健「パニック」
 - ・阿川弘之「鱧とおこぜ」
 - ・丹羽文雄「厭がらせの年齢」
- 谷崎潤一郎「鍵」
-
- 一九八〇年 三島由紀夫「憂国」と他の作者の短編
 - 一九八二年 大江健三郎「個人的な体験」
 - 一九八三年 夏目漱石「坊っちゃん」
 - 一九八五年 川端康成「雪国」
 - 同「千羽鶴」
 - 島崎藤村「破戒」
 - 森鷗外「雁」
 - 井伏鱒二「黒い雨」
 - 有吉佐和子「華岡青州の妻」
 - 太宰治「斜陽」
 - 川端康成「眠れる美女」
 - ★高木敏子「ガラスのうさぎ」
 - 川端康成「古都」
 - 灰谷健次郎「兎の眼」
 - 竹山道雄「ビルマの豎琴」
 - 川端康成の短編集「伊豆の踊子」
 - ★中国と日本の短編（チュラロンコン大学）
 - 川端康成「みずうみ」
 - 同「名人」
 - ★「日本近代文学短編選第四集 芥川龍之介短編集」
 - ・「羅生門」
 - ・「藪の中」

- ・「芋粥」
- ・「地獄変」
- ・「戯作三昧」
- ・「トロツコ」
- ・「白」
- ・「三つの宝」
- 一九九二年 安部公房「砂の女」
- 一九九五年 ★夏目漱石「こころ」
- 一九九八年 ★「日本近代文学短編選第五集 太宰治短編集」

- ・「富嶽百景」
- ・「女生徒」
- ・「駆け込み訴え」
- ・「待つ」
- ・「ヴィヨンの妻」
- ・「赤い太鼓」
- ・「桜桃」
- ・「魚服記」

(★は日本語から翻訳したもの)

年表から見えるように、日本近代文学作品は多くタイ語に訳された。一方、古代文学作品の方は見当たらない。一九七九年に日本古代文学作品「古事記」のタイ語訳が出たが、原

作の「古事記」から訳したものではなく、タマサート大学の学生たちが短編の「古事記物語」から訳したものである。今までタイ語に訳された日本古代文学はこれしかないようである。

タイ語訳の日本児童文学の例として、宮川ひろ「春駒のうた」、「おかあさんのつうしんぼ」、「先生のつうしんぼ」、黒柳徹子「窓ぎわのトットちゃん」、松谷みよ子「ふたりのイーダ」、「ちいさいモモちゃん」、長崎源之助「人魚がくれたさくら貝」などがある。その他に、ミステリー小説の方も多少訳され、特に江戸川乱歩の作品が多い。

小説以外の作品についてはカンラヤニー氏の論文に報告がある。近松門左衛門の戯曲のタイ語訳として、「曾根崎心中」、「心中天網島」、「国性爺合戦」などがある。これは英語から訳されたが、まだ出版に至っていない。あとは謡曲と狂言で日本語からタイ語に訳されたものもある。これは「羽衣」、「葵の上」、「高砂」、「忠度」などである。他に「箕被」と「附子」のタイ語訳もある。

最近タイ語訳の日本文学作品はあまり見当たらない。新しいものが出ず、古いものもあまり売れない状態である。次に、タイにおける日本文学作品の翻訳状況とその問題について述べておきたい。

三 タイにおける日本文学作品の翻訳状況とその問題

約二十年前にさかのぼり、一九七七―一九八六年の日本文学作品の翻訳状況および問題について、前掲ナイヤナー論ではこう指摘されている。言語、芸術、教育の面などと比べ、日本文学の紹介は非常に少なく、文化の影響力として弱い。それは、翻訳家の問題に関わっている。第一に、日本語の言語能力が十分な翻訳家がいないと考えられる。第二に、英語訳の日本文学作品をタイ語に翻訳する際に、独特な日本文化の理解不足のため、解釈することが困難であり、原作とのずれが生じやすい傾向にある。

それでは、二十年経った現在では、日本文学はどのような状況に置かれているのだろうか。タイでは、日本語学習者が年々増えており、言語能力は向上しつつあるように見える。しかし、一般的に語学勉強が中心となっており、日常生活のコミュニケーションレベルにとどまってしまう、専門的なレベルにまで及ばないのである。特に日本文学の場合は言語のみではなく、感覚レベルの理解力、読解力が必要とされる。日本の大学に留学したような、いわゆる研究者レベルの人達でも、日本文学に興味を抱いて研究する人はきわめて少ない。数少ない日本文学研究者は教育機関で日本語の授業にほとんどの時間を奪われ、研究そのものに励む時間はほんのわずかしかない。時間の問題だけではなく、学会など日本文学を研究するための具体的な「場」がなく、個々の研究者同

士のつながりも薄く、研究者を十分にサポートする制度ができていない状態にある。したがって、研究のことよりは、まず、日本文学をより多く紹介することが優先となる。日本文学の「伝え役」として、翻訳家としての役割が際立ってみられる。

しかし、翻訳自体に関する問題は、著作権の問題もあるため、翻訳作品が限られてくる。「今までタイ語に訳された日本文学作品は筋書きに変化が乏しく、情緒に富んだ作品が多いうえに、またその話があいまいなので、変化に富んだ作品が好きなタイ人にとっては日本文学はあまり面白くないかもしれない」といったカンラヤニー氏の見解がある。

人間内部を描く作品は、特にタイ人には理解しづらいところがあり、受け入れにくい傾向にある。それは翻訳する側においても、文化の違いの落差をうまく言葉で埋められなくて、読者側に「伝わらない」結果となる。今日に至って、日本文学の愛読者はほんの一部の人達に限られており、日本文学のニーズがあまりにも少ないため、日本文学の翻訳活動は活動的ではないと言えよう。

二十一世紀に向け、日本ブームといわれる現象の中、より多くのタイの人々が日本文学に触れ、現代の流行ばかりでなく、日本人の精神性など日本の新たな一面をかいま見ること、によりよい「文化の交流」が出来るようこれから先大いに

